

# 宗教の負からネーションの負へ : ユダヤ人 アイデンティティについて

内田, 俊一

---

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編 / 法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編

(巻 / Volume)

99

(開始ページ / Start Page)

23

(終了ページ / End Page)

34

(発行年 / Year)

1997-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004770>

## 宗教の負からネーションの負へ

——ユダヤ人アイデンティティーについて——

内田 俊 一

「尋ねてよいのなら、お前のNationは何だね？」と市民は言う。

ジュームズ・ジョイス「ユリシイズ」

カフカは、その作品の中では「ユダヤ」という言葉を、一度も使わなかった。しかし彼が描き出したものは、紛れもなくユダヤ人の状況、とりわけそのアイデンティティーをめぐる苦悩である。そして後の世代はその作品の中に、人間存在の原型を発見した。とすればそれは、カフカが抱えた問題が、単なる民族問題などではなかったことの証明となる。カフカが作品中に「ユダヤ」の言葉を使わなかったのは、単なる韜晦などではない。彼は、そのあまりにも特殊な問題の底に潜む普遍性を、意識していた。特殊と普遍とは、対立する二項ではない。特殊と対峙するものとして想定された普遍は、おそらく擬似的な普遍にすぎない。特殊をつきつめたところにこそ、普遍はある。

ユダヤ人のアイデンティティーの問題が、なぜ普遍的意義を獲得するのか。それに答えるのが困難なのは、そもそも「ユダヤ人」を規定することが困難だからである。ユダヤ人とは、規定不可能な存在そのものであると、規定してみたい誘惑にかられるほどだが、それはただの言葉の遊びというわけでもない。二千年以上にわたって混血を

繰り返し、住む国によって肌の色さえ様々なユダヤ人を、生物学的概念である「人種」によって規定することが可能なのももちろんだが、それは「民族」によって規定することさえできない。世界中に分散したユダヤ人たちは、通常考えられている以上に、彼らが住む地域の宿主民族の文化から影響を受けている。それはなにも、「ユダヤ人解放」が問題となった近代以降だけの話ではない。イベリア半島イスラム教圏のセファルディムと、ドイツを中心とするヨーロッパ・キリスト教圏のアシケナジムの、二つの文化圏が成立したのは、中世の出来事である。ひとつの国ないし地域の中のユダヤ人にだけ着目すれば、そこに文化的・民族的な統一性が存在するかのように見えるとしても、世界的な広がりの中で捉えれば、ユダヤ「民族」ないしユダヤ文化の統一性など、少なくともユダヤの母体からのキリスト教の分離・独立以来、そもそも初めから存在しなかったと考えるべきだろう。

「十八世紀の後半まで、部分的にはさらにそれ以後も、ドイツのユダヤ人たちは、世界の至る所に住むユダヤ人たちと、本質的には同じ生活を営んでいた。彼らは民族として明確に識別でき、紛れもないアイデンティティと、数千年におよぶ固有の歴史を持っていた。」このゲルショム・ショールムの言葉は、「ユダヤ人解放」を旗印に掲げて、ユダヤ人に同化の道を、つまり究極的には（ユダヤ人としての）消滅の道を指示した、十八世紀ドイツ啓蒙主義の欺瞞を暴くものとして、たしかに現在でも意義を失なわない。だがこれは、客観的事実というよりも、十八世紀後半から今世紀初頭に至る、ドイツにおけるユダヤ人解放の歴史の挫折が投げる影に、彩られた発言である。ショールムの言葉は、イスラエル建国に関わったシオニストとしての彼の思想に、直接つながっている。だが民族でもないものに民族国家の形を与えるというこの倒錯は、ヨーロッパにおける反ユダヤ主義の高まりから引き出された否定的結論にすぎず、その国際的認知は、ナチズムの直接的な——負の——影響下にある。イスラエル共和国という国家は、最初からナチズムの刻印を受けて成立した。それが時にナチスと見紛う行動をとったからといって、驚くことは何もない。糾弾されなければならないのは、本来自らのキリスト教文化が生み出したユダヤ人問題を、自らの文化圏外に追放して知らぬ顔を決め込む、ヨーロッパ諸国の身勝手である。

十八世紀後半以前のドイツ（あるいはヨーロッパ）では、ユダヤ人たちは、本当に何の疑いも容れない自らのアイ

デンティティーを所有していたのだろうか。仮にそうだとしても、それはたとえばドイツ人が自らをドイツ人と感じ、フランス人が自らをフランス人と感じ、あるいは日本人が自らを日本人と感じる、その自足性とは完全に異なる何ものかであったはずである。そのアイデンティティーは、否応なく、<sup>ナショナリティ</sup>宿主民族側から与えられる負の刻印によって性格づけられざるをえなかった。現代の大多数のユダヤ人が、「<sup>ナショナリティ</sup>国籍から言えば、ユダヤ人以外の何者かであり続けている」<sup>(2)</sup>のと、おそらく本質的な事態は変わらなかっただろう。ユダヤ人アイデンティティーには、常に曖昧さがつきまとう。そもそもユダヤの宗教が、ヨーロッパにおいてはキリスト教に対する否定性として位置づけられた以上、当初からそのアイデンティティーは、正に対する負という相対性の中で形作られるほかなかった。

ユダヤ人共同体から排斥され、いかなる社会的帰属も失なったスピノザが、それにもかかわらず後世のユダヤ知識人たちにとって、「ユダヤ人のアイデンティティーの二本となった」<sup>(3)</sup>のは、なぜなのか。シヨールレムの発言との関連で言えば、スピノザは（ドイツではなくオランダではあるが）すでに十七世紀の人間である。スピノザにユダヤ人アイデンティティーの原型を見ることは、現代の状況を歴史に投影することにすぎないのだろうか。だがアイザック・ドイッチャーは、彼のいわゆる「非ユダヤ的ユダヤ人」の系譜を、スピノザやその先駆者であるウリエル・アコスタから、さらにミドラシユの中に報告された、紀元百年頃のある異端的ラビにまで遡っている。<sup>(4)</sup> ハナ・アーレントが「隠された伝統」<sup>(5)</sup>と言う時、その伝統を隠しているのは、正統派ユダヤ教徒の共同体である。しかしそれはまた、支配的なキリスト教社会によっても「隠されて」いる。公認された歴史は、支配者による歴史にとどまる。正としてのキリスト教教会によって、負としての位置を与えられた正統派ユダヤ教会も、支配体制の不可欠な補完要素である。歴史の裂け目からこぼれ落ちる人々にこそ、焦点は合わせられなければならない。

ユダヤ人を「人種」や「民族」によってではなく、宗教によって定義しようというのが、戦後の欧米の良心的歴史学者の態度だったと言ってよいだろう。というよりユダヤ人を「人種」と規定したことによる論理的帰結が、ナチスによる致命的な終局を惹き起こしたことによって、他に規定の手段が残らなかったと言う方が正確かもしれない。しかしそのような捉え方は、単に歴史的事実に反するだけではない。すでに何世代も前にキリスト教に改宗

し、自分ではユダヤ人であるとは全く意識せず、時にはそのような事実を知りもしなかった数多くの人々が、その素姓を調べ出され、あらためてユダヤ人として規定されて殺された以上、そのような捉え方は歴史を糊塗する欺瞞として機能せざるをえない。

仮にユダヤ人を宗教によって定義するとすれば、その宗教の本質が問われなければならない。おそらくそれによってしかキリスト教との明確な相違を指摘できないがゆえに、頻繁に言及され、きわめて評判の悪いユダヤ教の律法の煩瑣な諸規定と、二十世紀においてはナチスにその最も純粋な後継者を見い出すことができる、ユダヤの宗教の持つ選民思想的要素（それは彼らの宗教の、あくまでもひとつの側面にすぎないだろう）を、ひとまず措くとすれば、ユダヤの宗教の本質はどこにあるのか。それは抽象的な唯一の人格神という思想と、聖書（キリスト教の言い方に従えば旧約聖書）以外にはあるまい。だとすれば、その思想と聖典を自らのものとして受け入れられている以上、キリスト教徒もイスラム教徒も、ユダヤの宗教の信奉者であり、ひいてはユダヤ人だということにならざるをえない。このあまりにも単純な事実が目に見えないのは、キリスト教やイスラム教が支配的な国に住んでいる人間だけである。

結局ユダヤ人は、「人種」によっても、「民族」によっても、また宗教によっても規定できない。ユダヤ人（ヨーロッパにおけるユダヤ人）は、ヨーロッパの歴史のブラックホールのようなものであり、いかなる規定も受けつけぬ存在と言うべきなのだろうか。しかしこのブラックホールが、ヨーロッパの正に対する負として形成されたのだとすれば、逆にまたヨーロッパ人のアイデンティティも、このユダヤという負を措定した上での正として、あくまでもその関係性の中で形作られざるをえなかった。その意味でユダヤ人は、キリスト教成立以来のヨーロッパの基礎を成す一部分であり、不可欠な構成要素である。ユダヤを問題にすることは、必然的に、ヨーロッパの歴史の総体を根底から覆すことにつながる。

しかしショーレムの言う意味ではないとしても、たしかに十八世紀後半のドイツにおいて、ユダヤ人のアイデンティティーをめぐる何かが変化したように見える。公認の歴史によれば、この時期に起きた出来事は、ほぼ次のように要約できるだろう。自由、平等、博愛を旗印に掲げる啓蒙主義の潮流の中で、キリスト教ヨーロッパが抱える最大の不平等な存在たるユダヤ人の問題が、時代のひとつの焦点となる。レッシングは最初期の『ユダヤ人たち』（一七四九年）と、彼の最後の戯曲である『賢者ナーター』（一七七九年）という二つの作品によって、このユダヤ人解放の問題に造形を与える。そしてこの動きに対応するかのようになり、ユダヤ人の側からモーゼス・メンデルスゾーンという時代の寵児が登場し、啓蒙主義の福音の体現者、「人類の新しい手本」（ヘルダー）となる。

この流れは、必然的に政治の側面での動きをも惹き起こし、ドイツ人の側では、プロイセンの高級官僚クリスチアン・ヴィルヘルム・ドームの「ユダヤ人の市民的改善について」（一七八一年）によって、ユダヤ人への市民権付与が主張され、それは結局、プロイセン内務省の文化・教育局長となったヴィルヘルム・フォン・フンボルトらの尽力による、一八一二年のハルデンベルクの「ユダヤ人解放令」として結実する。（ただしこの「解放令」は、一八一五年には早くもすでに撤回されるのだが。）

ユダヤ人の側では、モーゼス・メンデルスゾーンの後継者とも言うべきダーフィット・フリートレンダーらによって、ユダヤ教改革の努力、つまり近代市民社会に受け入れ可能な宗教への変形が行なわれ、この流れは、彼の『幾人かのユダヤ人家長の回状』（一七九九年）による、ユダヤ人のキリスト教への集団改宗の提案にまで突き進む。これは結局キリスト教世界の側からあえなく拒絶されるが、しかしユダヤ女性たちを中心とするベルリンのロマン派文学サロンに見られるように、ユダヤ人上層階級の間では、個人的次元でのキリスト教への改宗と、非ユダヤ人との結婚が驚くべき速度で進行していき、これが、その後続く、さらに広い範囲にわたるユダヤ人アイデンティティー喪失の先触れとなった。

外面的に見れば、十八世紀後半のドイツで起きた事態は、このようなものだった。ユダヤ人への市民権付与を推し進めようとした非ユダヤ人啓蒙主義者たち、レッシングやドームやフンボルトの念頭にあったのは、ユダヤ人解

放であり平等であつただろう。それに呼応したユダヤ知識人たちの念頭にあつたのは、キリスト教徒であれユダヤ教徒であれ、区別なく妥当する普遍的人間性だつただろう。ユダヤ人アイデンティティーが失なわれたのは間違いない。しかしもし「普遍的人間性」が実現したとすれば、それに代わる「普遍的人間」アイデンティティーとも呼ぶべきものが成立したはずであり、アイデンティティーの分裂をめぐる苦惱が生じることはなかつただろう。

しかし事態は、そのようには進行しなかつた。この時期に現出した「ドイツ人とユダヤ人の社交生活の短い黄金時代」<sup>(9)</sup>が、その後次第に否定されていったと捉えるべきでは、おそらくない。ここからナチスによる致命的な結末までは、一直線の道が伸びている。ここで実際に起きた事態と、当事者たちの頭にあつた構図の間には、おそらく隔たりがあつた。

十八世紀には、ユダヤ人はひとつの Nation と呼ばれる。しかし Nation という概念が、民族と同時に国家を含意する限りにおいて、民族として捉えることはあるいは可能でも、国家として構想することは完全に不可能なユダヤ人は、最初から反語的存在たらざるをえなかつた。非ユダヤ人啓蒙主義者たちの善意と、ヨーロッパ文化に参入しようとするユダヤ人たちの熱意にもかかわらず、あるいはそれらの意図と奇妙な関係を保ちながら、ここで起きたのは、ユダヤ人をめぐるヨーロッパのパラダイムの組み換えだつた。正としてのキリスト教ヨーロッパに對置された、かつての宗教的な意味での負が、国民国家を指導原理とする新たな体制の中で、あらためて位置づけ直された。負の Nation として、つまり Nation の原理に根本的に對立し、そこには永遠に統合不可能な負の存在として。

宗教的な意味での負が問題となる限り、正として構想された側が、本来自らの基盤であるこの相対性を振り捨て、自らの正の絶対性を主張したとしても、行き着く先はせいぜいユダヤ人のキリスト教への強制改宗か、あるいは極端な場合でも、宗教集団としてのユダヤ人の壊滅にすぎなかつた。しかし Nation としての負の存在の抹殺が問題とされた時、それは文字通り「民族」としてのユダヤ人の絶滅に帰着するほかなかつた。

十八世紀後半のドイツで露出した、ユダヤ人アイデンティティーの分裂は、この地核変動の表層現象だっただろう。完全にユダヤ的であり続ける宗教的アイデンティティーを残したまま、一方でまた全面的にヨーロッパ的でドイツ的な文化的アイデンティティーを獲得できると考えたモーゼス・メンデルスゾーンを始めとして、この時代のユダヤ人社会 upper 層部の同化志向のユダヤ人たちは、「おもてではひとり人間、自分の家ではユダヤ人」でありうる空想した。「だが実は彼らは、おもてでは自分らが他の人間とは異なったもの、つまりユダヤ人であると感じ、自宅では他のユダヤ人とは異なるもの、つまり自民族の大衆よりも基本的に優越したものであると感じたのである。」<sup>(1)</sup>

古いパラダイムによって完全に規定されつつ、昔ながらのユダヤ人アイデンティティーにとどまり続ける、下層大衆のユダヤ人たちとは異なって、彼ら上層の同化ユダヤ人たちは、パラダイムの変換が要請する位置へと、状況の展望を欠いたまま引き寄せられていく。彼らの目から見れば、彼らがめざす目標地点は普遍的人間性である。しかし実際に彼らが到達するのは、人間であるならば誰にも普遍的に与えられてしかるべき Nation ではなく、Nation ならぬ Nation、負としての Nation なのである。十八世紀後半には、まだこの流れに衝き動かされるのは、一部の上層ユダヤ人たちに限られる。しかし時を追うごとに、ますます広範なユダヤ人大衆が、この流れに呑み込まれていくことになるだろう。

ユダヤの宗教とヨーロッパ的・ドイツ的文化の両立をめざしたモーゼス・メンデルスゾーンの精神的姿勢が、その後のユダヤ人たちのアイデンティティー分裂の端緒になったとは、しばしば指摘されるところである。しかし彼は時代に衝き動かされたにすぎない。レッシングの戯曲『ユダヤ人たち』は、作者がメンデルスゾーンというモデルを知る以前に、すでに書かれていた。メンデルスゾーンのドイツ精神史への登場は、啓蒙主義による、つまり非ユダヤ人の側からの要請に基づくものである。そして彼が昔からのユダヤ人アイデンティティー、つまり宗教的な負としてのユダヤ人の位置づけを脱しようとしたことに、彼の罪があるのでもない。もし彼になんらかの責任があるとするれば、それは、自分を衝き動かしている流れが、どこに向かっているのかを見ることができなかったことだ



ろう。しかしそれは、ユダヤ人であると非ユダヤ人であるとを問わず、当時の誰の目にも見えなかったのである。ダーフィット・フリートレンダーによるユダヤ人集団改宗の提案、つまり「より優れたキリスト教徒が（その宗教の）基本的真理を再検討に附することを条件として、より優れたユダヤ人が……典礼規定のヴェールを脱ぎ捨て、公然と社会と同化する」という申し出は、現代の目から見れば、つまりナチスによるユダヤ的存在の抹殺の試みの直接の結果として、いやでもユダヤ人意識が強化されざるをえない現代の目から見れば、あまりにも不まじめな印象を与える。しかし彼は真剣だった。彼の念頭にあったのは、おそらく、ユダヤの宗教を、正に對する負として位置づける、古いパラダイムから抜け出すことだった。しかし問題は、もはやそこにはなかった。パラダイムの転換は、すでに目に見えぬ場所で起きていた。非ユダヤ人の側からは、彼はまじめに相手にされず、ほとんど嘲笑の對象にしかならない。

残された道は、文学サロンという回路を経た、個人的な改宗と通婚への道だった。この道は、男性よりも女性が先行した。「女の方が……ユダヤ人の場合は……男よりも百パーセント都合がよい。」（フリードリヒ・ゲンツ）

ドイツ社会の「指導階級が否も応もなくユダヤ人を受容したばかりか、驚くべき熱狂をもって彼らをたちまち同化し、自分のうちに摂り込んでしまおうとした」この不思議な時代を、どう評価すべきだろうか。たしかにこの当初の同化の動きは、ごく一部の上層ユダヤ人たちに限定され、また当事者であるユダヤ女性たちには、ユダヤ人の全体としての政治的解放など眼中になく、ユダヤ人の境遇から個人的に抜け出すことが、もっぱら問題だったことは間違いない。しかしこの改宗から通婚への道は、時代を下るに従って、たとえばカール・マルクスの例にも見られるように、次第に女から男へと、そしてさらに広範な階層へと普及していった。その意味で、この時代に見られる事例が、のちの歴史に刻印を与える典型例となったことは否定できない。

のちのナチスの御用歴史家たちのように、この時代のユダヤ女性たちのサロンが、知的な会合と見せかけた誘惑の装置であり、彼女たちが、前途有為なドイツの若者をサロンに誘い込んだ性倒錯の実践者だったと評価するのは、悪意に満ちた中傷だとしても、しかしそこに幾許かの淫靡な雰囲気立ち籠めていたことも、また否定できない。

い。ドイツ貴族と結婚することによって、ユダヤ人の境遇から抜け出そうとしたユダヤ女性たちと、市民階級の勃興によって、すでに没落の道を辿り始め、どうしても裕福なユダヤ娘の持参金が欲しかったドイツ貴族の、双方の思惑の一致が、この時代のサロンの隆盛の背後にあったことを、見逃すことはできない。

だがこの時代のサロンを賑わしたユダヤ女性たちの、少なくとも最良の部分は、けっして単なる打算で行動したわけではなかった。モーゼス・メンデルスゾーンの娘ドロテアが、親に決められたユダヤ人の夫を捨てて駆落ちし、のちにはキリスト教への改宗を経て、正式に結婚する相手のフリードリヒ・シュレーゲルも、またラーエル・レヴィンの結婚相手のファルンハーゲンも、市民階級のドイツ人であり、貴族ではなかった。ロマン派のユダヤ女性たちにとって、キリスト教は、それ以前のユダヤ世代にとってのように、単に社会に順応するための衣装のようなものではなく、ロマン派の思想の影響を強く受けて、きわめて個人的・内面的なものとして受けとめられていた。彼女たちは、律法に捕われた伝統的ユダヤ教徒に対してばかりでなく、フリードリヒ・シュレーゲルのような新しい傾向の代表者に対しても反発を感じ、そのようなロマン派的キリスト教に強く魅かれていった。<sup>(11)</sup>

彼女たちがキリスト教に寄せた感情には、少なくとも主観的には、けっして嘘はなかった。そしてきわめて特徴的なことに、その感情は、彼女たちが思いを寄せた相手であるドイツ人男性への恋愛感情と、深く絡み合っていた。たとえばそれは、フリードリヒ・シュレーゲルと結婚するためにプロテスタントに改宗し、さらに彼に従ってカトリックに改宗したドロテアに、最も明瞭に見て取ることができる。あるいはまたヘンリエッテ・ヘルツのシュライエルマッハーに対する感情にも、そしてもしかすると、ラーエル・レヴィンのゲーテ崇拜にも、同様の要素を発見できるだろう。

不幸なことに今日ではユダヤ人に対して、アウシュヴィッツかイスラエルかという、二者択一の道しか残されなかったかのような外観を呈している。そしてそれこそがまさに、ナチズムの最大の遺産であり、しかもその遺産の効果は、ソ連邦を中心とする公認社会主義国家の崩壊以後、むきだしのナシヨナリズム以外にいかなる指導原理も残らなかつたかに見える現代の世界において、ますます力を強めつつある。しかしこの現代の構図を、そのまま十

八世紀後半のドイツに適用して、ユダヤの宗教を捨てて同化の道を突き進んだ者たちを断罪すべきではないだろう。アウシュヴィッツという名の挫折に終わる同化の道と、イスラエルという名を持つに至るユダヤ人アイデンティティーの主張の道の二者択一が、彼らの目の前に呈示されていたわけではなかった。

彼らがめざしたのは普遍的人間となることであり、そしてその普遍的人間の資格においてヨーロッパ人となることであり、さらに人間としての普遍的資格において、誰にも与えられてしかるべきNationを、つまり彼らの場合であれば、自分たちが居住するドイツというNationを獲得することだっただろう。そして彼らの目には、そのためにユダヤの宗教を捨てることは不可避であり、ある種の痛みを伴うとはいえ、けっして人間として断罪されるべき行為とは映らなかつたはずである。

事実それは、もはや大したことでなかった。ユダヤ人をめぐるパラダイムの転換は、目に見えぬ地層の深部で起きていた。ユダヤの宗教を捨ててキリスト教に改宗したとしても、彼らにドイツのNationは与えられなかつた。彼らに与えられたのは、NationならぬNation、反語的な、負のNationでしかなかった。

ハナ・アーレントは、処女作であるラーエル・レヴィンの伝記を、夫ファルンハーゲンが伝える、次のような彼女の死の床での言葉から始めている。「なんとという物語でしょう！——エジプトとパルステイナから逃れて来た女である私が、ここであなたの助けと愛と看護を受けているのです！……崇高な歓喜をもって、私はこの私の起源と、この運命のつながりの全体を思い浮かべます。それによって人類の最古の記憶が、物事の最新の状況と結び合わされ、最も遠く離れた時間と空間が結び付けられたのです。私の生涯のかくも長い時間にわたって、私にとって最大の恥辱であり、最も辛い苦悩であり不幸であったこと、つまりユダヤ女に生まれたことを、私は今、いかなる代価と引換えでも手離したくないと思うのです。」

迫り来つつあるナチズムの足音を聞きながら、つまり同化の道が招いた致命的な結末を目前にしながら、この処女作を書いたハナ・アーレントは、ラーエルの姿の中に、あるべきユダヤ人アイデンティティーを読み取ろうとした。もちろんそれは、与えられた負のNationalityを正のNationalityであるかのように装って、いわば擬似的

Nationを形成すること(それがイスラエル共和国として結実したNationだろう)から生まれるアイデンティティーではない。ラーエルにとって(そしてハナ・アーレントにとっても)ユダヤ人であるとは、社会の縁に生きること、すなわち本当の意味では社会に所属していないために、そのあらゆる偽善や嘘から自由であることを意味した。それによってユダヤ人には、他の人々がそれに対して盲目であるような事柄を、認めることが可能になる。つまりそれは、与えられた負のNationを負の形のままに引き受けることによって、正のNationのまやかしを逆照射することにはかならない。Nationを指導原理とする世界の体制に統合不可能なユダヤ人は、その体制の欺瞞を暴露する反射鏡として、今も存在し続けている。

【注】

- (1) Gershom Scholem: *Deutsche und Juden*. Frankfurt a. M. 1967, S.24.
- (2) Michael A. Meyer: *Jüdische Identität in der Moderne*. Deutsche Ausgabe, Frankfurt a. M. 1992, S.10.
- (3) A. a. O., S.24.
- (4) アイザック・ドイッチャー「非ユダヤ的ユダヤ人」。鈴木一郎訳、岩波書店、一九七〇年、三三三ページ以下。
- (5) Hannah Arendt: *Die verborgene Tradition*. Frankfurt a. M. 1976, besonders S.46ff.
- (6) ハナ・アーレント「全体主義の起源」。『反ユダヤ主義』。大久保和郎訳、みすず書房、一九七二年、一一二ページ。
- (7) 前掲書、一〇六ページ。
- (8) 引用は前掲書、一〇七ページに46%。
- (9) 引用は以下に24%。 Hannah Arendt: *Rahel Varnhagen. Lebensgeschichte einer deutschen Jüdin aus der Romantik*. Neuausgabe. München 1981, S.41.
- (10) アーレント「前掲書」一一二ページ。
- (11) Cf. Michael A. Meyer: *Von Moses Mendelssohn zu Leopold Zunz. Jüdische Identität in Deutschland 1749-1824*. Deutsche Ausgabe. München 1994, S.104f.
- (12) Arendt: *Rahel Varnhagen*. S.15.
- (13) アーレントは「前掲書」ユダヤ女性である自分の「いわば原型を、ラーエルの中に読み取ろうとしている。もしアーレントとハイデガーの「恋愛」を問題にするのならば、その最初の出会いの時期の末期に書き進められた、この処女作との内

的連関の中で論じられなければならない。そうでなければ、それは単に性的に老獪な大学教授と、うぶな女子学生の間  
の、ありふれた恋愛遊戯の物語に終わってしまうだろう。